水高　園子
illustration
有馬　かつみ
やさしく強く
抱きしめて

やさしく強く抱きしめて

《立読み版》

氷高　園子

イラスト　有馬　かつみ

ネオンのやや落とされた、控え目な明かりが照らす夜の路。笑いさざめきながら行き交う人々の話し声も華やかながらもどこか落ち着き、穏やかに響く。

早くもでき上がった酔っぱらいさえも好き勝手にわめくことはなく、この夜の街の醸し出す優雅な雰囲気の中、その描かれる絵の一部となって行き過ぎる。

神戸（こうべ）、三宮（さんのみや）。エキゾチックな異人館や異国の船の着岸する港で有名な、関西の一都市。この街の繁華街は、そういった一種独特の雰囲気を醸し出していた。

規模でいえばアジア最大の歓楽街、東京の新宿歌舞伎町（しんじゅくかぶきちょう）や、同じ関西で最大規模を誇る大阪心斎橋（おおさかしんさいばし）にはかなうべくもない。しかし小さいからこそまとまった、この街でしか味わえない独特の雰囲気が好きだと、わざわざ遠方から足を運ぶ客も少なくないのだ。

そんな三宮の、北野坂（きたのざか）と呼ばれる異人館への路途中。夜の炎が輝く北野通りの一角に、その店はある。ホストクラブ『エデン』――テナントビルの十階をワンフロアとして営業するこの店に、初顔見せのホストがいた。

「ユウ」

後ろから、声がする。都筑悠里（つづきゆうり）は、グラスを洗う手をとめて考えた。悠里――ユウ。そう、あまりに馴染みのない名前だと呼ばれたときにとっさに返事ができないと思い、本名に近い源氏名を考えたのだ。

「ユウ」

「は、いっ！」

洗剤で泡立った手をそのままに、悠里は勢いよく振り返った。勢いで泡が飛び、後ろに立っていた男のスーツに白い模様を作る。悠里は、慌てた。

「す、すみませんっ！」

慌てて手もとのダスターを取り上げ、自分の作ってしまった泡の模様を拭おうとする。しかし高価そうなスーツを汚された男は怒ることもなく、悠里の持ったダスターを受け取った。

「このくらい、拭けばいい。そんなに慌てるな」

悠里の慌てようがよほどに面白かったのか、男はくつくつ笑いながら、泡を拭き取る。

「すみません、でも……」

「それより、グラスさっさと終わらせてこっちに来い」

泡をかけられても余裕の笑みを見せるのは、『エデン』で一番の古株であり、同時に『エデン』開店以来ナンバーワンを保持し続けているという 不知火（しらぬい） ――本名はそのまま 錦見（にしきみ） 不知火というらしい、変わった名前の男だ。悠里の面接をしたのもこの男だし、代表という肩書きで『エデン』のホスト全員を統括しているのも、この男だ。

悠里は、丁寧に服を拭う不知火に思わず目を奪われる。最初に会ったときからそうだったけれど、何にせよ、目を 惹（ひ） く男なのだ。つり上がった形のいい瞳、いい意味で男くささを醸し出す、濃い眉。通った鼻梁に、それらの濃さとは裏腹なやや酷薄に薄い唇。それらが絶妙なマッチを見せている不知火は、今まで悠里の見たことのない種類の美形だった。

一番すごいと思ったのは、店のホームページにアップロードしてある写真と実物が、ほぼ変わらないことだ。たいていのホストは、修正にどれだけ金をかけたのだろうと妙な勘ぐりをしてしまうくらいに、写真と顔が違うのに。

そして悠里が『エデン』の面接を受けようと思ったのは、『エデン』のホームページにあった不知火の写真が妙に心に残ったからだった。

男相手に、「心に残った」もなにもない。そうは思いながらも、入店の決意をするきっかけになった

不知火に面接をしてもらい、今もこうやって親しく声をかけてもらうことが、嬉しくないわけはない。
「顧問がおいでだ。挨拶しろ」
「あ、はいっ！」
悠里がこの世界に足を踏み入れる前はまったく知らなかったことで、今でもちゃんと把握しているとは言いがたい。それはこの、肩書きの序列だ。
「顧問、って、えと……」
急いで残りのグラスを洗い終わり、水切りに伏せる。それを手早く手伝ってくれた不知火は、口ごもる悠里を見て、にやりと笑った。
「一番の、お偉いさん」
「……あ」
つまり、『エデン』の最高責任者だ。悠里はにわかに緊張した。店長補佐に、店長に、代表補佐に、代表。そして顧問。店によっていろいろな肩書きがあるらしいが、今のところ悠里が把握しているのはそのくらいだ。
『エデン』の最高責任者である「顧問」には、悠里は会ったことがない。手を拭きながら緊張が隠せ

ずにいる悠里に、不知火はまた笑う。
「新入りがいるっていうから、興味あってこんなに早くおいでなんだと。いつもなら、十二時より早く来ることってないんだけどな」
悠里は、ちらりと腕時計を見た。まだ八時前。開店前の『エデン』には、まだ「準備中」の札がかかっているはずだ。
「しばらく、新入りなかったからな。どんなのか自分の目で見たいってところなんだろう」
「そんな、困ります……」
顧問に興味を持たれているということに、緊張がますます大きくなる。
「興味持たれるほどじゃないし、なんていうか、あの……」
「バーカ」
言って、不知火は手を伸ばしてきた。悠里の頭を抱え込んで、拳をぐりぐりと押しつけてくる。
「……っ、……」
ぞくり、と悠里の背に悪寒が走る。しかしそれを押さえ込んだ。こんなことではいけない。この程度で動揺していてはいけない。我慢しなければ。そうでないと、わざわざこの職業を選んだ甲斐がない。

だから身の奥から湧きあがる不安を押し込めて、悠里はことさらに明るく言った。
「痛っ、不知火さん、痛いですっ！」
「自信過剰め」
「そんなんじゃないですって……」
『エデン』は、そう広くはない。二十畳ほどのワンフロア、その奥にはスモークガラスの衝立（ついたて）で仕切られた、六畳ほどのＶＩＰルームがひとつ。
歌舞伎町や心斎橋のホストクラブには五十畳だの百畳だの巨大なフロアを持っていて、スタッフも百人を超えるようなところもあるらしいが、自分にはこのくらいの規模の店がちょうどいいと思う。スタッフも全部で十人ほどで、面接の日から今日まで、たいていのスタッフとは顔合わせをし、会ったことがないのは件（くだん）の顧問くらいだ。
「おい、不知火」
店の奥から声がする。酒灼（や）けのした低い声に悠里がぴしりと背を正すと、不知火はまた笑って、悠里の背をどんと叩いた。

◆

どうやら、顧問のお眼鏡にはかなったようだ。

まずは今日、一番最初に来店した客につくこと。その客がリピーターなら、一本ボトルを入れさせること。ボトルの種類はなんでもいいけれど、二万円以上のものが好ましい。五万円以上なら、即幹部候補にしてやると言われた。

「何ですか、幹部候補って……」

「あの人、肩書き好きだからなぁ」

控え室で、笑いながら不知火がパンツのポケットからマルボロメンソールの箱を出す。あ、と思ったときにはほかのスタッフがライターを差し出していて、一番近くにいたのにとっさに反応できなかった自分を、悠里は恥じた。

「すみません……」

「まぁ、そんなにすぐ慣れることはない」

ふぅ、と紫煙を吐き出しながら不知火は言う。

「初々しいのがいいって客もいるからな。そういう新入りをいじって喜ぶのも多いから、覚悟しとけ」
「いじって、って……」
何をされるのだろう、と悠里は肩をすくめる。同時にからん、とカウベルの鳴る音がし、いらっしゃいませ、と出迎え担当のスタッフが声を揃える。悠里の緊張は、最高潮に達した。
「来た……」
「お前、客を化けもん扱いすんな？」
笑って不知火は、悠里の額を軽く弾く。びくり、と悠里が肩を震わせたのには、気がついていないようだ。
「行くぞ、お前の幹部入りがかかってる」
「あ、はい！」
幹部入りはともかく、初めての客だ。悠里は背筋を正す。まだ体の奥に残っている悪寒をふるい落とすようにひとつ大きく身震いをして、控え室から足を踏み出した。

◆

さぞや着飾った、けばけばしい女性が来るのだと思ったのに。

出迎えのスタッフが席に案内していたのは、ベージュのＯＬスーツのメガネの女性だ。やや崩れてはいるものの髪の裾が巻かれていて、指先にはパールの入ったピンクのマニキュアが光っている。黙ってオフィスのデスクに向かっていれば、誰もがホスト遊びをする彼女など想像しそうにないその客は、ひとりだった。

慣れた調子でエスコートされ、ソファに座る。不知火に促されて彼女におしぼりを差し出した悠里は、彼女が「二万コース」か「五万コース」か、どちらなのだろうかと迷うばかりだ。

「あら、初めての子ね」

おしぼりを受け取りながら、客は言う。

「そうなんです。今日、初めてなんですよ」

「へぇ、神翔（かみと）が決めたの？」

「いえ、綾（あや）さん。俺が」

神翔とは、顧問の源氏名だ。綾という名らしい客は不知火を見上げ、微笑んだ。
「ふうん、不知火が」
「なかなか見どころあると思いまして」
「見どころ？　どんな」
薄化粧ながらにしっかりと整えられた目もとが、悠里を見る。悠里はぎこちなく頭を下げ、挨拶をする。綾はじろじろと遠慮もなく悠里を見、何はともあれ教え込まれた営業用スマイルを、悠里は浮かべた。
「初々しさです。我らがエデンきっての初心（うぶ）さ担当、これ、いけると思いましてね」
「初心（うぶ）担当！　あははっ、それ、最高」
まだ酒も入っていないのに、声を立てて明るく笑った綾は、自分の座ったソファの隣をぽんぽんと叩いた。
「ここ」
「え？」
綾は、悠里を見てそう言った。思わず問い返し、不知火を、ほかのスタッフを見やり、彼らは一様に

顔を歪めた。もっとも露骨にしかめたわけではない、表情は笑顔のまま、悠里に通じるようにだけ「顔を歪めた」のが伝わってきたところに、悠里は驚く。

「ユウ、綾さんのお呼びだ」

「いいなぁ、ユウ！　綾さんに呼んでもらえるなんて」

「あ……」

そういうことか。ここに座れ、と言われたのだとやっと気がついて、悠里は慌てて奥に向かう。綾の隣に座ると、頭を下げた。

「ユウです。よろしくお願いします」

「そんな、やめてよ。真面目すぎ～」

綾の言葉に、気を悪くしてしまったかとびくりとした。しかし綾は明るい笑顔のまま、じっと悠里を覗き込んできた。

不知火と、和樹（かずき）という源氏名のスタッフがテーブルを挟んだ前に座る。すでに焼酎のボトルが用意され和樹がグラスの氷を入れているあたり、それが綾のキープしているボトルなのだろう。

そのボトルを、二万円のものに変える。もしくは、五万円のものに。幹部になりたいというわけでは

ないが、やる以上は期待に応えないと、ここにいる甲斐もないだろうと思う。
そんな悠里の、妙な気合いが表情に出ていたのだろうか。綾が、整えられた眉根をしかめる。
「何かこの子、すっごく真面目そう。ホストなんてできるわけ？」
「初心（うぶ）担当ですから。綾さん、いじってやってくださいよ」
「あははっ、いじるって、こんな感じ？」
はっ、とする間もなかった。不知火の言葉に応えるように、綾のきれいな白い手が伸びてくる。
「……ぁ、っ……」
その手が、悠里の脇腹に這（は）った。伸ばされたピンクの爪が、引っかくように動く。
「ひ、……っ……」
悠里は大きく息を呑んだ。全身に這う悪寒。ぞくり、と体の芯までが震える。
しかし、すんでのところで悠里は声を噛み殺した。懸命に、へにゃりと口もとを歪め、笑顔を作る。
「こちょこちょ～」
楽しげに綾がくすぐってくるのに、どうにか笑顔で応えることができた。綾が楽しそうな顔のままであるところから、悠里が感じた怖気（おぞけ）は顔には出なかったのだろう。

「あ、やさん。やめてくださいよぉ」
できるだけ戯けた口調で、悠里は言った。綾の両手を掴み、自分の脇腹から離させる。それだけで綾は、まんざらでもない顔をした。
「俺、くすぐられるのダメなんです。すっごい、マジで笑っちゃう」
「いいじゃない、笑ってよ。ほらもっと」
そのまま、またくすぐってこようとする綾の手を掴んだまま、引き上げる。綾にホールドアップさせた体勢で、さてこの手をどうしたものか。
助けを求めて、不知火と和樹に目をやった。不知火は、悠里がどう出るかと楽しむようにこちらを見ているし、和樹はしきりに視線で促してくる。
（うう……）
バーにも行ったことのない、完全に水商売初心者の悠里に、不知火が教えたことのひとつ。それは複数のホストが客についた場合、客に対しての「担当」があるということだ。軽いトークで楽しませる担当、下ネタなどで盛り上げる担当。飲みに努めてボトルを空ける担当。そして。
（この展開は……俺が、エロ担当!?）

客の手を取ってキスしり、ふたりきりになっていちゃいちゃしたり。さすがに初心者の悠里を客とふたりきりにはしないだろうが、手とはいえ、すでに綾に触れている悠里が「セクハラエロ担当」になってしまった流れは拒めずに、悠里はさっと血の気が引いた。

そうでなくても、綾の手を握っているというだけでも震えを押えるのが精いっぱいなのだ。これ以上彼女に触れるのは――。

（……う、ううん）

そのために、ホストという仕事を選んだのではないか。荒療治に過ぎるかとも思ったが、この仕事でプロフェッショナルになることが、自分の「過去」と決裂する方法だということを。そのためには、乗り越えなくてはいけない壁があるということを。

（う、ん……）

思い返し、悠里は己を鼓舞する。そして綾の右手を引き寄せると、その小指の先に、ちゅっと唇を落とした。

「……ふ、わっ」

妙な声を出したのは、綾だ。ホストクラブに通い慣れているらしい彼女なのに、見ればかすかに頬を

赤らめて、大きく目をしばたたいている。そして悠里をくすぐろうとしていた手を、ぱっと引っ込めてしまった。

「し、不知火！」

綾が叫ぶ。不知火は、ん？というように首をかしげた。

「この子、ユウくんだっけ？　初めてだって言ってたじゃない！」

「見どころあるよ、ユウくん」

顎の下に手を置き、戯けた口調で不知火は言った。

「仮にもこの綾さんに、キスするなんてな。本当にホスト、初めてか？」

「えっちもしたことないみたいな顔をしてて、やるねぇ、ユウ」

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

やさしく強く抱きしめて

《立読み版》

発行日　２０１１年６月３０日
著者名　氷高　園子
イラスト　有馬　かつみ
発行所　【ＭＩＬＫ－ＣＲＯＷＮ（ミルククラウン）】
株式会社水晶院
http://www.milk-crown.net/

(C) Sonoko Hidaka 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。